



Title	メトニミーの非指示的側面に関する覚え書き
Author(s)	杉本, 孝司
Citation	大阪外大英米研究. 1999, 23, p. 91-98
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99221">https://hdl.handle.net/11094/99221</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# メトニミーの非指示的側面に関する覚え書き<sup>1</sup>

杉 本 孝 司

This is a short note on the implication of nonreferential aspects of metonymy. While the referential aspects of metonymy may be amenable to formal semantic solution, the nonreferential or functional aspect of metonymy reveals the defect inherent in the formal semantic approach to the description of natural language phenomena.

客観主義的意味論観<sup>2</sup>にもとづく形式意味論を初めとする真理条件意味論<sup>3</sup>の企てにおいて中心的な作業となるのは、記号と、集合論に基づいて構築されるモデル理論の対象物の対応関係の指定である。このような作業が、内包と外延両領域において行われる。例えば文の場合、その内包は命題(指標から真理値への関数)として、その(特定の指標における)外延は真理値として、また固有名詞においては、その内包は個体概念(指標から個体への関数)として、その(特定の指標における)外延は個体として、また動詞句の場合は、その内包は属性(指標から個体の集合を表す特性関数への関数)として、その(特定の指標における)外延は個体の集合を表す特性関数として、それぞれ規定される。このような企て、あるいはそれに類する意味論的企て<sup>4</sup>は、そのいずれもが、人間の認知作用とは独立した形で意味論が構築されていることはよく知られていることである。そのような意味論を総称して指示的意味論(referential semantics)と呼ぶことができよう。

指示的意味論は記号の指示対象を指定することを意味論の中心的課題とする訳であるが、このような意味論の捉え方にはやはり認知意味論<sup>5</sup>の立場か

らは大きな疑問が種々唱えられることになる。本覚え書きにおいては、そのような中から、「記号が何らかの対象物を指示する」ということに関して、指示的意味論が仮にそのような作業に成功したとしても、やはり認知的な観点からは未解決の重要な問題が無視されてしまっていることを指摘することにより、指示的意味論の皮相性を示し、自然言語記述としての認知意味論的アプローチの妥当性を示唆したいと思う。

今仮に指示対象物として時空間でその存在が限定される人や物に限って話をすすめることにしましょう。このように語られる対象を恣意的に限定するのは、指示対象に関してもっとも普通に語られるのは人や物であるから、ということもあるし、また一般的に指示的意味論のモデルの要素として用いられるのもそのような人や物である、ということもある(もちろんモデルの要素にはこれら以外を設定することもできるし、また、人や物といった要素から集合論的により複雑な指示対象物を構築することも可能であることは言うまでもない)。そして、このような基本的なレベルにおいてさえ指示的意味論の皮相性は顕著であるということを確認するのが本稿のねらいであると言ってもいいかもしれない。

人や物に関してもっとも普通の指示が問題になるような場合、例えば、

- (1) a. The cat is on the doormat.  
b. John is in the kitchen.  
c. John killed the cat.

など、記号論理学においてよく登場するような例では、(確定記述の取り扱いとは別としても)それぞれthe cat, the doormat, John, the kitchenなどその指示対象は、どれもモデルの要素として存在するものに関して、モデル理論的に何の問題もなく同定できるものばかりである。論理学において取り扱われる多くの例がこのような例に集中していることは、自然言語の意味記述手段としての論理学や形式意味論に関する幻想を生み出す要因になっていた(る?)かもしれない。

このような事実は、例えば

(2) a. *The mushroom omelet* left without paying the bill.

b. Norman Mailer likes to read *himself*.

の斜字体に関する理解<sup>6</sup>の捉え方にも悪影響があったであろう。(2a,b)はいずれも字義通り解釈することは不可能であるので、それが字義通りに解釈され得るような、

(3) a. The one who had eaten the mushroom omelet left without paying the bill.

b. Norman Mailer likes to read books (written) by himself.

といった新たな構造の存在が仮定されるということも生成文法の歴史の上では行われた<sup>7</sup>ことがある。論理学者はそのような「文構造」の存在は仮定しないまでも、(3)のようなパラフレーズが容易に作れるという事実の存在を前提に、(2)の論理表記を例えば(3)に対応するような形で与えるということは普通に行っている訳である。彼等に言わせれば(2)のような表現が可能であることは自然言語の欠陥であり、そもそも(3)のように、論理的に問題のない表現を用いるべきである、ということにもなる。このようなことから自然言語は科学的探究の道具としてははなはだ不適當な言語である、などともされた。

確かに指示対象だけが自然言語の意味であるならば、(2)などに関する論理学者たちの反応は正しいものであろう。論理的に問題のない(3)の表現が可能である所に何もわざわざ一見矛盾する読みを生み出す可能性のある(2)のような表現を用いる理由など何も見当たらないわけであるから。そして(3)のようなパラフレーズが可能な例にのみ注意が集中していると、論理学者たち(や一時期の生成文法家たち)の主張が正しいものであるかのような印象を持つことになってしまうかもしれない。

一般に(2)の斜字体の表現が持つ意味機能は「ある表現を使って異なる表現の指示対象を指す」ことであり、このような機能は普通「メトニミー」として知られている。(2)と(3)でこのことを表せば、

(4)           ある表現

異なる表現

a. the mushroom omelet

the one who had eaten the mushroom omelet

b. Norman Mailer

books (written) by himself

このようなメトニミーが人間本来の認知様式に基づいており、それは言語表現の問題ではなく、人間の概念把握や理解様式に関係することであることを数多くの例で示し、形式意味論的アプローチの不毛性を説いたのはFauconnier (1985/1994)である。本稿ではそのようなFauconnierの試みとは違い、メトニミーが持つ非指示的機能の側面からさらにこのことを検証していきたいと思う。

メトニミーにも実際には様々なタイプがあると考えられるが、例えば次の例(5)と(6)を比較して見てみよう。

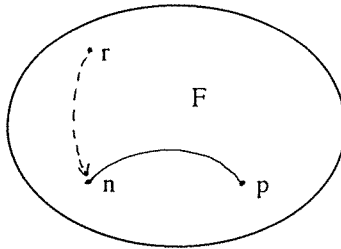
(5) Nixon bombed Vietnam.

(6) The U.S. Air Force pilots bombed Vietnam.

我々が知る限りにおいて、ニクソン大統領が自ら爆撃機を操縦してベトナムに爆弾を投下したという事実はない。実際に起こったことを客観的にある程度「論理的に」捉えて表現するとすれば、それは(6)などとなるべき所だろう。しかし、では、このようなメトニミーの場合、我々は(6)と言うべき所を、単に(5)の表現で代用しているのみなのであろうか?(2)と(3)に見る指示対象に関するものと同じような関係がこの(5)と(6)の間にもあるのであろうか?おそらくそういう面もないとは言えないであろうが、それよりもより重要な意味的側面がここにはあると考えられる。そして我々は「指示対象の決定」のみでは済まされない意味論上の重要な問題が隠されていることを確認することができる。今、客観的なベトナム爆撃の事情のみを取り上げ、(5)が表す指示関係をメンタル・スペース的に(7)のように表すとしてしよう。

つまり、the US Presidentという役割(r)を持つ人間(n)を指すNixonという記述を使ってパイロット(p)を同定している訳である。こうすることによって、(5)は(6)の状況を(メトニミー的に)指示できることになるわけである。しかしこのような場合、なぜ(6)と言えばよい所を(5)と言う必要があるのか、という問題が説明されていないことになる。換言すれば、なぜわざわざメトニミーを用いるのか、という問題である。この問いに対する答えはメトニミーの

(7)



r: the US President

F: Connector<sub>control</sub>

n: Nixon

p: pilots

$F(n) = p$

p bombed Vietnam.

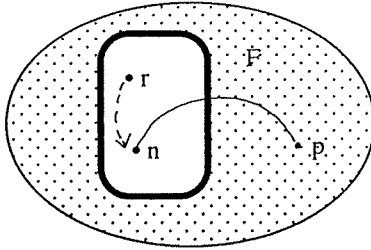
種類により様々変わり得ると考えられるが、(5)のような場合、「それは、ベトナム爆撃の責任の所在を明示的に述べたいからだ」ということが強く働いていると考えられる。(5)は

(8) 支配者を指示する表現を用いて被支配者を指示する

というメトニミーの例と考えられるが、一般に我々の社会的通念として、戦争における爆撃行為は、実際にそれを行うのがパイロットであるとしても、その行為の真の責任者はそのような命令を下す側、例えば上官や為政者などであると捉えている筈であり、そのような理解様式が(8)のようなメトニミーのパターンを可能にしているはずである。ということは、(6)と言わずにわざわざメトニミーを用いた(5)と言うことには、(6)にはない何か別の意味効果が意図されるような動機があるからだと考えられる訳である。そして、(5)におけるこのような特別な意味効果としては、「ベトナム爆撃の責任はニクソンにある」ということを言わんがため、ということが考えられる訳である。つまり、このような表現は爆撃行為自体を問題にするというよりも爆撃行為に対する合衆国大統領としてのニクソンの責任を問題にしている表現であると考えられる訳である<sup>8</sup>。つまり、(7)において、すべての要素r, n, pに様に同程度のプロミネンス<sup>9</sup>があるのではなく、(9)のような理解様式を想定することが一番この状況をよく捉えているのではないか、と考えられる訳である。

ここで太線の丸四角の枠囲みは注目されている部分、つまり認知的プロミ

(9)



r: the US President

F: Connector<sub>control</sub>

n: Nixon

p: pilots

$F(n) = p$

p bombed Vietnam.

ネンス<sup>9</sup>が高い部分、シャドーをかけた部分は認知的プロミネンスが低い部分を表す。つまり「合衆国大統領としてのニクソン」はフィギュア、それ以外の部分はグラウンドとして理解されているということである。このように、我々は日常の経験から(5)(のような戦争における爆撃行為に関して)は責任者とその任務遂行にあたる者たちの関係を(9)のように理解していると考えられる。つまり(5)の文を用いて我々が本当に伝えようとしていること、あるいは理解している状況は(7)ではなく(9)であるということができよう。

指示的意味論の立場に立つ限り、(5)の意味解釈として(9)を得ることは不可能である。なぜなら(9)は我々の事態の理解様式、杉本(1998b)で認知モデルもしくは認知原理と呼んだものが関わるものであり、それは集合論に基盤を置くモデル理論の対象物としては表現できない類いのものであるからである。もし本覚え書きの考察が正しいのであれば、我々はこのにおいても、自然言語の意味論としての形式意味論に内在する不備を確認することができ、認知意味論的アプローチの妥当性が追認できるのではないかなと言えよう。

## 注

<sup>1</sup> 本稿は一部、杉本(出版予定)に基づいている部分があるが、杉本(出版予定)と本稿の意図はまったく異なる所にある。

<sup>2</sup> 詳しくはLakoff(1987)を参照。

<sup>3</sup> 形式意味論の全体的アプローチの素描は杉本(1988a)などを参照。より詳しくはDowty, Wall, and Peters(1981)などのモンタギュー意味論関連の書物を参照。

- <sup>4</sup> 「状況意味論」などもその出発点は異なるにしても結局の所このような企ての一変種とみなすことができる。このことに関してはLakoff (1987)も参照のこと。
- <sup>5</sup> 最近の入門書としてUngere and Schmid (1996)、杉本 (1998b)などがある。
- <sup>6</sup> 例はFauconnier (1985/1994)から。
- <sup>7</sup> 例えばPostalなどのBeheadingがこれにあたる。
- <sup>8</sup> 表示方法はFauconnier (1985/1994)による。
- <sup>9</sup> 認知的プロミネンスに関してはLangacker (1996)、杉本 (1998b)などを参照。

### 参考文献

- Dowty, David R, Robert E. Wall, and Stanley Peters (1981) *Introduction to Montague Semantics*. Dordrecht, the Netherlands: D. Reidel. (井口他『モンタギュー意味論入門』三修社.)
- Fauconnier, Gilles (1985/1994) *Mental Spaces*. (2nd ed.) Cambridge, England: Cambridge University Press (1st English edition by M.I.T. Press, 1985). (坂原、水光、田窪、三藤(訳)(1987/1996)『メンタル・スペース:自然言語理解の認知インターフェイス』白水社))
- (1997) *Mappings in Thought and Language*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Johnson, Mark (1987) *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.(池上・河上他(訳)『認知意味論:言語から見た人間の心』紀ノ国屋書店)
- Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Ungere, F. and H.-J. Schmid (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London: Longman.
- 杉本孝司 (1998a) 『意味論1 -形式意味論-』 くろしお出版.

杉 本 孝 司

———— (1998b) 『意味論2 - 認知意味論-』 くろしお出版.

———— (出版予定) 「なぞなぞの舞台裏」『言語科学』 第3巻 東京大学出版会.